

# 「権威的知識」と言語の継承<sup>注1</sup>

－客家語の事例－

## The Production of Authoritative Knowledge in the language transmission: A case of Hakka Language

田 中 智 子\*  
Tomoko TANAKA

### Abstract

In Taiwan, "local language education" such as southern Min, Hakka, and aboriginal languages became a compulsory subject in all elementary and junior high schools in 2001. In conjunction with this change, the Ministry of Education began to take measures such as training "local language" teachers and conducting certification examinations, and assigning those who passed the examinations to teach "local language" classes. This paper focuses on Hakka, and based on the author's observations and interviews, shows that a phenomenon very similar to what is called "Authoritative Knowledge" in anthropology can be observed in government-sponsored local language education.

キーワード：権威的知識, 客家語, 台湾, 言語の継承

### I はじめに

台湾では、2001年度から全小中学校において、閩南語、客家語、原住民諸語などの「郷土言語教育」が必修科目となった。また、それに伴い、教育部が「郷土言語」教師の養成カリキュラムを実施したり、資格検定試験を実施して、その合格者に「郷土言語」の授業を担当させたり、といった施策を取るようになった<sup>1)</sup>。本稿では客家語を対象として取り上げ、筆者の観察やインタビューをもとに、政府が主導する郷土言語教育の中では、文化人類学で言うところの「権威的知識」と非常に似た現象がみられることを示す。

### II 「権威的知識」

文化人類学者であるブリジッド・ジョーダンは、1970年代に4カ国の出産システムについて観察、比較を行った。ブリジッド・ジョーダン（2001）『助産の文化人類学』の中で、彼女は「権

---

\* 関西国際大学 経営学部

「威的知識」について下記のように述べている。

中心にある観察は、特定のどんな領域でも複数の知識体系が存在し、その中のあるものが、それが世界の状態を当面の目的のためにはよりよく説明するという理由で（“効率”）、あるいはそれがより強力な権力基盤と結びついている（“構造上の優位”）ゆえに他の知識体系よりも重みを得るに至る、ということである。ときには同等程度に正統的な複数の知識体系があり、人々はその間を気楽に行き来し、特定の目的に応じてそれらを順番に使ったり、同時に使ったりする。しかし多くの場合、1種類の知識が支配権を得る。ある1つの知り方を権威的知識として正統化することは、他のすべての知り方から価値を奪い、しばしば完全にそれらを捨て去ってしまうことである。他の知識システムを信奉している者は、後ろ向きで無知な、あるいはナイーブなトラブルメーカーとして見られるようになる。ある論点について交渉する際に彼らが何かいうべきことがあったとしても、それは無関連、無根拠で的外れだと判断される（中略）。

権威的知識のもつ力は、それが正しいことにあるのではなく、それが重要視されるところからくる<sup>2)</sup>。

ジョーダン は出産システムに着目して「権威的知識」について論じており、西洋における権威的知識理論を踏まえる研究も殆ど妊娠と出産に関するものに限られていた。しかし、日本では飯田敦子が「伝統医療の復興とタイ・マッサージの普及—北タイにおける村民の対応」において、タイ政府が伝統医療復興のためにタイ・マッサージを「タイ式医療」の分野に含めて全国に普及させようとする動きとタイ北部の僻地住民との軋轢を研究対象として、ジョーダンの理論の利用可能性が一つの分野に限られていないことを示した。また、ゲーラット（2012）も民俗学的データの分析方法として「権威的知識」理論を用いる可能性について論じている<sup>3)</sup>。

本稿では、政府主導の「郷土言語教育」と、客家語母語話者が生活の中で自然に使用している言語とのずれに着目し、「権威的知識」の理論を用いて分析することを試みる。

### Ⅲ 台湾の客家語と客語能力認證考試

#### 1. 台湾のエスニックグループと言語の構成

台湾では、住民を構成するエスニック・グループを表す用語として、「四大族群」という言い方が1990年代以降用いられてきた。四はすなわち、原住民族、福佬人、客家人、外省人を指す。

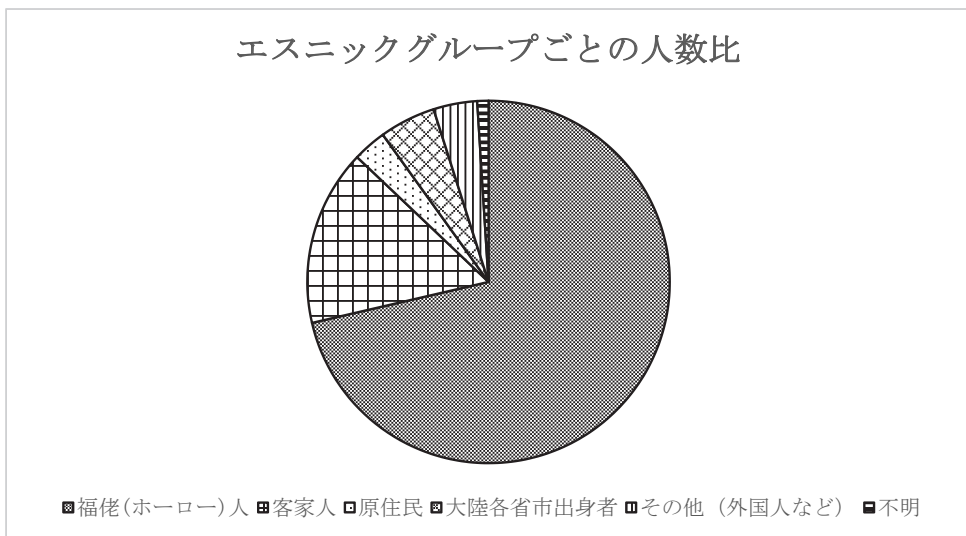
原住民族は一番古くから台湾に住んでいたオーストロネシア諸語を母語とする民族の総称で、現在16の民族が原住民族として認定されている。台湾の人口の2%強を占める。福佬人、客家人は、いずれも17～18世紀ごろ、中国大陸から台湾に移民してきた。前者は福建省南部の泉州や漳州から渡ってきたため、福建省の旧名から「閩南人」と言われることもある。台湾の人口の7割程度を占める。後者は広東省東北部や福建省の西部から台湾にやってきた。人口としては、10数%しかない。

外省人は、共産党との闘いに敗れた国民党政府が台湾へ撤退したのにもない、中国大陸から台湾に移ってきた政府や軍の関係者などである。100万人ほどが移り住んだといわれている。

ただし、各民族間の通婚が進んだことや、台湾人男性と結婚した中国大陆や外国籍の女性<sup>注2</sup>が原住民族と同等の人数を占めるようになったことなどから、最近では四大族群という用語はあまり使われなくなっている<sup>4)</sup>。

それぞれのエスニック・グループの人数については、上述したようにその定義がしにくいため、正確な人数を確定することは難しい。参考までに客家委員会が実施した2021年度の調査結果を図にすると、それぞれのエスニック・グループに属すると回答した人は、下記のような人数比になる。福佬人が人口の半分以上を占め、次に客家人と続き、原住民の割合は非常に少ない。なお、この調査では「外省人」という範疇は用いず、大陸各省市出身者、という用語で表している。このグループに外省人と、いわゆる「新移民」の一部（台湾男性との結婚のために中国から来た女性）が含まれると考えられる。

調査方法によって細かい数値は異なるが、この人数比については、どのデータについても同じような傾向を示している。



図表1 エスニックグループごとの人数比  
(出典) 客家委員会 (2021) 「110 年全国客家人口暨語言基礎資料調査研究」<sup>5)</sup>

以上の福佬人、客家人、原住民、大陸の各省市出身者については、それぞれの独自の言語や文化を持っているが、学校教育や公的機関では、通常、標準中国語（北京語）が使われているため、すでに自分の言語が話せなくなっている人も少なくない。

## 2. 台湾の客家語について

前節で述べたように、現在台湾にいる客家語の話者の多くは清代に中国大陆（広東省など）から移民してきた人の子孫である。

客家委員会の2021年の調査報告によると、法律上「客家人」と定義される人は11,976人、このうち客家語が聞き取れると答えた人は56.4%、流暢に話せるという人は38.3%である。

台湾で話されている客家語の方言グループには、話者数が多い「四縣」、「海陸」のほかに、「饒平」、

「詔安」,「東勢(大埔)」,「卓蘭」,「永定」などがある。また、四縣方言グループも、さらに北部(北四縣)と南部(南四縣)に分けるようになっている<sup>6)</sup>。

学校教育や公的機関では、通常、標準中国語(北京語)が使われている。また、一定年齢以上の人の話し言葉では、人口比で圧倒的多数を占める福佬人の言語(いわゆる「台湾語」)が使われることが多い。そのため、客家人でも客家語をあまり使わない人や、話せない人もいるのが現状である。

### 3. 客語能力認証

客家語の使用能力の強化や学習の奨励、客家語によるサービスの品質向上、客家文化の継承を目的とし、客家委員会が主催する「客語能力認証(客家語能力認証)」試験が実施されている。まず2005年に「客語能力認証初級考試(客家語能力認証初級試験)」が行われ、2023年9月現在では、「基礎級暨初級(基礎級および初級)」「中級暨中高級(中級および中高級)」「高級(高級)」の3つのレベルの試験が実施されている。この試験は、民族、国籍、年齢、性別、職業は問わず、受験ができる。なお、試験言語は「四縣、海陸、大埔、饒平、詔安」の5方言となっている。

この試験は19歳以下が無料であり、また、一定の率の合格者を出した学校の客家語指導者や、この試験に合格した公務員は報奨金がもらえるという制度がある<sup>注3)</sup>。また、各市や縣政府による報奨金もある。

そのためか、実際の試験に参加した人によると、学校で教員が客家語の能力が比較的高い生徒に受験を勧めることがあるほか、試験会場でも若い人の受験が多くみられたそうである。さらに、この方が客家語の方言の中で一番得意な言語は南四縣であるが、四縣の試験問題は北四縣を基準に作成されており、南四縣の話し手にも配慮されてはいたものの<sup>注4)</sup>、南北で語彙に差異がある部分もあることから、やはり聞き取りがしにくかったとのことであった。一方で、事前に問題集や語彙集が無料で配布され、試験はこれらの問題集から出題されるため、試験勉強をしっかりとすれば、ネイティブスピーカーでなくとも合格は十分可能であるとのことである。逆にネイティブスピーカーであっても、試験勉強をしなければ不合格になる可能性もあるという指摘もあった<sup>注5)</sup>。

さらに、実際に話されている言語との違いとしては、次の点が挙げられる。第2節で述べたように、台湾の客家語は学術的には7つの方言に分類することができる。しかし、話し手がごく一部の地域に集中していて、話者数の非常に少ない「卓蘭」や「永定」のような方言は、試験言語に含まれていない。

以上のようなことから、「客語能力認証」はあくまでも英検やTOEIC、TOEFLのような語学の資格試験に相当するものであって、現実の言語の使用状況とは別のものとして考えるべきであろう。

## IV 「権威的知識」と個人(現地の話者に対するインタビューから)

本章では、苗栗県卓蘭鎮在住の男性に対するインタビューをもとに、客家委員会主導で作られた教材や資格試験制度が一種の「権威的知識」の役割を果たしていると考えられる状況を紹介する。

## 1. インタビュー調査の背景

インタビュー調査を行った卓蘭鎮は、客家語の複数の下位方言が話されている地域で、一つの家庭の中でも夫婦が異なる方言の話し手である場合もある。また、福佬語の話者も住んでいる。このような事情から、一人の人が客家語の複数の方言や福佬語を相手によって使い分けるということもあるそうである。例えば、卓蘭鎮のみで話されている卓蘭方言は、基本的には四縣方言の一派であるが、海陸や饒平、東勢など他の方言の影響を受けているため、独立した方言としてみなされている<sup>7)</sup>。このことから、他の方言についても、相互に影響を受けている可能性は否めない。

インタビューの対象者 A さんは1950年生まれ、生まれてからずっと卓蘭鎮内の同じ地区で生活している。また、自身は饒平方言の話し手であると認識している。農業を生業としているが、饒平方言の教材作成にかかわったことがある。

A さんの姪にあたる B さんが、筆者の依頼を受けて、2023年1月に電話インタビューを行い、録音した。なお、この録音を論文に引用することについては、A さん、B さんともに了承済みである。また、すべての会話は基本的に国語、いわゆる北京語で行われ、その録音データは台湾出身の北京語話者の支援を受けて文字化した。以下に挙げる例は、その資料の一部を田中が日本語に訳したものである。

次の節では、認証試験にまつわる状況、具体的には、教材編集における状況、および認証試験と教授資格について、「権威的知識」と考えられる例をインタビューの中から3つ挙げ、分析を加える。

## 2. 「権威的知識」の例 (1) —教材の語彙

### 2.1. インタビューからの具体例

A：こっちも正真正銘の饒平方言の話し手というわけじゃない。ただ、自分たちが知っている言葉が正しいと思って話しているんだ。あの、よくわからなかった fu24kiam11 (敷居) っていう言葉みたいにさ、あれはここでは fu55kiam11 っていうだろ、あの、饒平方言の「標準語」の言い方、前は使ったことなかっただろ、…

B：使ったことなかった。

A：使ったことないだろう。あのときの知り合いの年寄りだって、あんなふうにいる人はいなかったぞ、あれを標準語っていうんだったら、標準語ってなんなんだ、… (以下略)

### 2.2. 分析

ここで語られているのは、「饒平」教材で示されている語彙が、必ずしも話し手が日常使用している語彙とは一致しないということである。家の「敷居」を表す語の声調(トーン)について、教材の発音のしかたと自分たちが日常使用している発音のしかたが異なることを述べている。同様の状況は、他の方言でも報告されている<sup>注6)</sup>。また、谷口(2005)でも、閩南語や客家語の「郷土言語」教育において、「学校で教師が教える「郷土言語」が、生徒の親や親戚が使用する「郷土言語」の音や表現と異なる場合もあり、学習者の混乱を招いている」と指摘されている<sup>8)</sup>。しかし、第3章3節で述べたように、客家語能力の認証試験に合格するには、自分自身、親や親せきの話している音や表現ではなく、教科書や試験用の参考資料に記載されている音や表現を覚えなければならない。高雄市美濃区は客家語の母語話者が9割以上を占める地区であるが、この地

区の小学校でも、認証試験の受験対策クラスでは、この地区の言葉を教えるのではなく、受験用の問題集を使って勉強させているとのことである<sup>注7</sup>。この状況は、教科書や試験のための参考資料が「権威的知識」となる可能性につながる。

さらに、将来子どもたちが親や親せきの話すことばよりも、教科書や参考資料のことばを重視するようになれば、それは「権威的知識」としてより確立されたといえそうである<sup>注8</sup>。

### 3. 「権威的知識」の例 (2) —教材編者の母語が「標準」になる

#### 3.1. インタビューからの具体例

A：それからだんだんあの〇〇（人名）っていうのが、客家委員会で卓蘭ではどういう風に言っていたか発言するようになって、俺たち卓蘭の饒平方言のことばは、だんだんほかの人間が編集するようになった。俺たちの言葉は、あの人たちが話してる饒平方言とは違う。あの人たちの饒平方言はたくさん海豊方言<sup>注9</sup>が入ってる。あの人たちは、海豊出身の人と一緒に住んでるから、…

(中略)

A：あの人たちは基本的に海豊方言をしゃべってるから、

B：そうそう。あの人たちはみんな海豊方言をしゃべってる、

A：海豊方言をしゃべってる。饒平方言ができるのは間違いないけど、饒平方言の人間は人数がすごく少ないと思う。海豊方言を話している人とずっと接触してるから、

(以下略)

#### 3.2. 分析

2つ目の例も1つ目の例に関連する現象といえる。Aさんは最初教材作成のプロジェクトに関わっていたが、該当の客家語方言に対する個人の語感には差異があり、次第に他の人物が議論の主導権を持つようになった。

会話の内容はあくまでもAさんとBさんの感覚であり、この人物の話す饒平方言が実際に海豊方言の影響を多く受けているかどうかは不明である。また、言語学的な立場から言えば、この人物の話す饒平方言もAさんが話す饒平方言も言語としての優劣があるわけではない。

しかし、Wardhaugh, R. and Fuller, J. M. (2021)によれば、標準語というものは言語学的なものというよりもむしろ、社会政治的な要因によって生まれてきたものだという。そして、「イデオロギー的な側面を持ち、その集団の『正しい』『適切な』言語となる。」「その結果、ほかのすべての変種は標準語のような地位や力を持たなくなる」<sup>9)</sup>。上記の会話からは、教材編集作業の中で発言力の強い人の語感に合ったことばが、客家委員会のような政府組織（＝より強力な権力基盤）と結びついて、この方言の「標準語」とみなされ、「権威的知識」となっているようにみえる。

### 4. 「権威的知識」の例 (3) —客家語認証試験

#### 4.1. インタビューからの具体例

A：あの客家委員会（の委員）がここにきて村民大会をしたときも俺たちは言ったんだよ。ここにいる年寄りに認証試験を受けろっていうけど、ローマ字ピンインなんてできるやつはいないのに、どうやって試験をうけるんだって。それで（委員が）言ったんだよ、じゃあ帰って



二つの方法を考えますって。年寄りだって、客家語を教える資格はあるんだ、一番資格があるのは年寄りなんだ、だけど…

B：資格がない。

A：ないない、あの認証がな。

B：そうだよな、証明がないから。

A：あの認証は本当に腹が立つよ。何の資格があって、人を試験するっていうんだ？もう70とか80で、子どもの時からずっと標準的な饒平方言を話してるんだぞ、そっちは20とか30なのに、俺たちを試験するなんておかしいじゃないか。それが矛盾してるんだよ。だから、客家委員会はこんな基本的な道理を考えないんだ。だから、正直言って俺は饒平方言の試験は受けないんだ。

#### 4.2. 分析

民國109年（西暦2020年）2月21日に発布された「高級中等以下學校及幼兒園客語師資培育資格及聘用辦法(高校以下の学校及び幼稚園の客家語教師養成資格及び雇用方法)」第2条によれば、客家語のコースを教えるためには、客家語を専攻して専門の教員免許を取得するか、認証試験の中級以上の級を取得する必要がある<sup>10)</sup>。しかし、この認証試験に合格するためには、ローマ字のピンイン表記も学ばなければならない。流暢に客家語が話せるはずのお年寄りでも、ローマ字表記を一から覚え、試験勉強をして認証試験に合格することはなかなか難しいため、学校などの公の場で客家語を子どもたちに教えるといったことができない、という矛盾が起きていることがうかがえる。

### V おわりに

以上のように、ある客家語の話者のインタビューを通して、次のような状況を見てきた。母語を守るための「郷土言語」教育と資格試験の推進を行う現場において、客家委員会、つまり、政府主導の客家語教材や資格試験が「権威的知識」として働いているとみられる現状である。

本稿の目的は、台湾で実施されている客家語認証試験や、その試験に関わる教材作成、講習会のありかたについて批判することではない。言語を継承していくため、多くの人が学べるように教材を作成したり、教師を養成したりすることは、客家語だけに見られる状況ではない。また、全く知識がない人に体系的に言語を教えるためには、「標準化」された教材や辞書の作成も必要だろう。

ただし、それらを主導する客家委員会や、客家委員会に委嘱された専門家や教材の編者が「権威的知識」とみなされ、それによって、もともとその土地で使われていたことが軽視される可能性があることにも注意を向ける必要がある。

2023年8月に筆者がある地域で調査をしている際、発音の確認をしようとして単語を複唱したところ、筆者が聞き取れなかったのだと判断した研究協力者がすぐにスマートフォンでオンライン辞書を引き、「これがこの単語のピンイン表記だ」と教えてくれた。この方は、認証試験のための研修を受講したことがあり、教員資格も持っているため、おそらく「客家語学習者」に対する講義と同じ感覚で教えてくれたのだろう。この方の発音と辞書の表記は、もちろん一致してい

る可能性は高いが、4章で示したように、まれに土地や話者によって、辞書や教材とは異なる発音や表記をする場合もある。この地の自然な言語現象を確認しようとしていた筆者はとまどったことがあった。少なくともこれまでの現地調査ではなかった経験である。

客家語の話者は台湾の中でも割合が少なく、客家語そのものを守ろうとするならば、現状の「郷土言語教育」や資格試験はやむを得ないかもしれない<sup>注10</sup>。ただし、今後本当の意味で言葉という文化を残そうとするならば、やはり教育や資格試験とは別に、その土地の言葉を記録する作業は必要であろう。また、実際に現地に赴いてその土地の言語を観察し、それを記述している研究者がおり、彼らの研究の成果が「郷土言語教育」に活かされている側面があることも指摘しておきたい。

#### 【注】

- 注1 本稿は、2023年2月4日に開催された、関西国際大学 Well-being 研究所共同研究プロジェクト「伝統と個人」2022年度第1回研究会で発表したものを整理し、まとめたものである。
- 注2 「新住民」と呼ばれる。
- 注3 「奨励措施」客語能力認証112年度オフィシャルページ  
(<https://hakka.sce.ntnu.edu.tw/hakka/view.php?page=incentives>)  
茨城大学星純子准教授の私信によれば、公務員や、高雄県（縣市合併後は高雄市）政府が管轄する美濃客家文物館のボランティアは、この資格があると優遇されるとのことである。
- 注4 単語が南四縣の発音で発音されていた。
- 注5 上述の星准教授私信
- 注6 能力試験を実際に受験した星准教授によれば、資格試験の勉強をする中で、自身が聞きなれている南四縣方言の語彙とは異なる語彙があったそうである。またほかのネイティブスピーカーからも同様の経験があることを聞いたことがあるそうである。
- 注7 上述の星准教授からの情報による。
- 注8 関西国際大学 阿部忍准教授のご指摘による。
- 注9 広東省汕尾市海豊県で話されている閩語の一種。
- 注10 2023年8月11日から10月15日まで「世界客家博覧会」が桃園市で開催された。筆者が台湾で客家語の調査を始めた1999年当時に比べると、客家の地位が非常に高くなったと感じる。星准教授には、現在客家語が話せると優遇されるような状況があり、本稿で主張したように、客家語の中で認証試験に代表されるようなバリエーションが「権威的知識」となるだけでなく、将来的に客家語そのものが「権威的知識」になっていく可能性もあるのではないかとのご指摘をいただいた。

#### 【引用文献】

- 1) 谷口龍子, 「台湾における「郷土言語」(1) 教育とその問題——「國民中小學校九年一貫課程」(2001)を中心に——」『ICU 比較文化』37号, 65頁, 2005
- 2) プリジット・ジョーダン (宮崎清孝, 滝沢美津子訳), 『助産の文化人類学』日本看護協会出版社, 184-186頁, 2001
- 3) ゲーラット, クリスチャン, 「民俗学の研究方法としての権威的知識理論」『常民文化』35号, 29-38頁, 2012
- 4) 田上智宜, 「エスニック・グループ」, 『台湾を知るための72章』, 明石書店, 154-158頁, 2022
- 5) 客家委員会, 「110 年全國客家人口暨語言基礎資料調查研究」, 『學術調查研究資料庫』[https://srda.sinica.edu.tw/browsingbydatatype\\_result.php?category=surveymethod&type=4 &typeb=019&csid=131](https://srda.sinica.edu.tw/browsingbydatatype_result.php?category=surveymethod&type=4 &typeb=019&csid=131) (2023年8月30日閲覧)
- 6) 鍾榮富, 『臺灣客家語音導論 第二版』五南出版, 12頁, 2007



- 7) 鍾榮富,『臺灣客家語音導論 第二版』五南出版, 14頁, 2007
- 8) 谷口龍子,「台湾における「郷土言語」(1) 教育とその問題——「國民中小學校九年一貫課程」(2001)を中心に——」『ICU 比較文化』37号, 74頁, 2005
- 9) Wardhaugh, R. and Fuller, J.M. *An Introduction To Sociolinguistics*, Wiley Blackwell, 30-34頁, 2021
- 10) 「高級中等以下學校及幼兒園客語師資培育資格及聘用辦法」『全國法規資料庫』<https://law.moj.gov.tw/LawClass/LawAll.aspx?pcode=H0070085> (2023年 9 月 2 日閲覧)

#### 【参考文献】

- ・客家委員会,「112年度客語能力認證(獎勵措施)」  
<https://hakka.sce.ntnu.edu.tw/hakka/view.php?page=incentives> (2023年 9 月 2 日閲覧)
- ・客家委員会,「112 年度基礎級暨初級認證簡章」『客語能力112年度認證』  
<https://hakka.sce.ntnu.edu.tw/hakka/view.php?page=generalRegulations> (2023年 9 月 3 日閲覧)
- ・客家委員会,「112 年度第2次客語能力中級暨中高級認證簡章」『客語能力112年度認證』  
<https://hakka.sce.ntnu.edu.tw/hakka/view.php?page=generalRegulations> (2023年 9 月 3 日閲覧)
- ・客家委員会,「112 年度第2次客語能力高級認證簡章」『客語能力112年度認證』  
<https://hakka.sce.ntnu.edu.tw/hakka/view.php?page=generalRegulations> (2023年 9 月 3 日閲覧)

#### <謝辞>

この問題について考えるきっかけとなり、貴重なお意見をいただいた Well-being 研究所合同研究プロジェクト「伝統と個人」のメンバーとワークショップご参加の先生方、多くの情報を提供してくださった星純子先生、丁寧なコメントをいただいた査読委員の先生方、忙しい時間を割いてインタビュー調査に協力してくれた黄莉芸さんにこの場を借りてお礼申し上げます。

